

強引なSランク勇者にクリトリス開発されながら、
滝のような孕ませどちゅどちゅされすぎて、
OLなのに神級回復力に目覚めるチート治療師になりました

プロローグ

第一章 ギルドでの出会い。

第2章 山賊討伐での覚醒と、夜営での強制的で執拗な責め

エピローグ

第二章より

山岳地帯を進む馬車が、突然停車した。わたしが、彼の横顔を見上げる。

「伏兵だ。山賊の群れが、道を封鎖している」

レオンの声は冷静だったが、彼の纏う魔力が急激に高まったのが分かった。

「えっえっ！ 山賊？」

「ここにいろ」

まるで消えるように、隣から居なくなった。

「レオン！」

馬車から飛び降りたレオンの剣技は、神速を超えていた。それはまるで、漆黒の雷光。彼の剣は空間を裂き、閃光となって山賊たちを薙ぎ払っていく。血飛沫も上がらない。

シャキン！

最後の刀が振り下ろされ、山賊たちは沈黙した。一瞬で勝負は決した……はずだった。

シュツ！

レオンが仕留めた山賊の死体から、突然ナイフが飛んで、腕を軽く掠められていた。

「あ！」

レオンが冷静にその山賊に近づいて、首の後ろに剣を突き刺した。

「ッ……毒か。俺は、少し浮足立っていたらしいな」

微かな呻き。だけど、その刹那、私は考えるよりも早く駆け出していた。恐怖よりも、この人をすぐに治さなければという、本能的な衝動が身体を突き動かしたのだ。

「レオン！」

私が、その傷口に両の掌を押し当てた瞬間に、身体中から青白い燐光が溢れ出した。光はレオンの傷口を覆い、血管の脈動が逆流するように、みるみるうちに解毒していく。

レオンが言った。

「回復速度が速い」

「わたし、魔法使えた……」

レオンの瞳が、驚愕に見開かれた。

「未熟だが、高次元治癒……いや、もっと上のスキルだ。……純粹な、勇者の治癒力」
言葉を聞いた瞬間、私の全身を電流が走った。

ぴくん……。

身体の芯から溶け出し、魔力と混ざり合うような、快感に近い悦びだった。

えっ？ えっ？ なんて？

「なんか、変……」

「魔力の過剰放出だ。初めて魔法を使ったのか？」

「うん」

「体が耐えられないんだ」

「そう……なの……？」

私は魔力の過剰放出に耐えきれず、その場に跪いたまま顔を上げられなくなる。するとレオンの掌が、私の熱くなった髪を優しく掬い上げた。

「あれくらいの傷など、自分で治せたものを」

「わたし、無我夢中で……」

「そうか……。ハルナ。今日から、お前は俺の専属治療師だからな」

その声は初めて、私にだけ向けられたような、甘い響きを伴っていた。

「はい……」

二人は馬車に戻り、休める野営地を探した。

「ここが良さだろう」

「はい」

なぜか、私はレオンの言葉に素直だった。とにかく、彼は私を包んでくれるよう。

そして……その夜。焚き火の赤が、二人を包み込む。

レオンは、意識が朦朧とする私の肩を、強く壊さないように押さえつけたまま言った。

「あの力を使いこなすには、循環を変えるしかない」

「……どういう意味？」

彼の言っていることが、理解できない。なぜか不安になり、全身が震えてくる。

「簡単だ。お前の魔力の器を、俺の肉体と接続して、俺を馴染ませるだけだ」
より一層分らずに、ポカンとしてしまう。

「まかせておけ」

私には、拒否権がない。ただ彼は問答無用で、私の服を剥ぎ取った。

「あ、あの！」

月光が、羞恥で紅潮した全裸の私の肌を照らす。鼓動が、耳の奥で爆発した。

「待って、レオン、こんなの！」

「いいから」

抗おうとするが、彼の指が私の鎖骨をなぞった途端、痺れるような稲妻が走る。

「あっ♡♡」

「ほら」

彼は喉を鳴らして笑った。氷のような微笑。けれど、唇は確実に熱を含んでいる……。初めて出会った時から、一度も見せなかった笑みをを見せてくれた。

キュン……。

「全部、俺に開け」

「う、うん」

「導いてやる」

レオンは私の膝裏を持ち上げ、焚き火の暖かい熱を浴びる側に向かせて、固定した。恥ずかしさで顔が燃える。月光と焚火の光が、秘部をはっきりと照らしている。

「やめてえ……熱い……」

抗うが、言葉とは裏腹に、下腹部が焚火の熱を帯びて自然と疼いて来る。

「感じるなら素直になれ。ほら、ここだろ？」

彼の親指がクリトリスを、加減なく押し潰す。

「んぱっ！」

無防備で、情けない喘ぎが漏れた。羞恥が脳天を貫き、同時に甘い快感が押し寄せる。

「そこは、触っちゃダメ……♡」

自分でも聞いたことのない甘い声が、喉からこぼれ落ちた。指先が触れただけなのに、視界が白く弾ける。腰が勝手に跳ね、レオンの腕に縋りついてしまう。

「……ほら、言っただろ。ここが弱いって」

低く優しい声が、耳元へ流れ込む。焚き火のはぜる音が遠のき、私の乱れた息だけが、夜の森に溶けていく。

「違っ……そんなの、知らない……っ」

「知らないなら、俺が教える」

囁きと同時に、指が肉芽を上下にこすり上げる。クリトリスの上をなぞるのではなく、押し潰しながら揉み込むみたいに執拗で、ジンッ、と深い快感が広がって来る。

「やあつ、らめ……無理、そこ、グッとなぞらないで……っ♡♡」

びくびくん！

「言葉と身体が逆だぞ？」

微笑むレオンの手が、さらに容赦をなくす。蕾を挟み込み、細かく震わせ、擦り潰し、優しく触れたかと思えば強い刺激に切り替わる。脳の奥が、電撃で焼かれるようだった。

「ひっ……♡ あつ、あつ、ああ♡♡」

レオンは私の秘部を照らす焚火を遮断するよう、顔を近づけてくる。その冷たい瞳が、涙と蜜で濡れた私の恥部を、ただじっと見つめている。

「み、みちやダメ」

「声を我慢するな」

意味がわからなかった。でも、言葉が届くより早く、熱がせり上がってくる。

「やつ、まって、まってレオンっ♡こんなの、慣れてない、無理、落ちる……っ♡♡」

「落ちていい。……俺が受け止める」

レオンの親指が、濡れて柔らかくなったクリトリスを円を描くように暴き回した。

「ひあああっ♡♡♡」

一瞬で、身体の奥から快感が炸裂した。背が跳ね太ももが痙攣し、意識が白く染まる。けれどレオンは、絶頂しきる前に肉芽をつまみ上げ、わざと刺激の角度を変える。

「まだ終わりじゃない。……何度でも開花させる」

「む、むり……っ♡ 壊れちゃう……っ♡ そんな、続けたら……しんじゃ……♡♡」

「死なない。お前は治癒士だ。壊れてもすぐ治る。……だから俺は遠慮しない」

氷のような声なのに、言っている内容は熱い。愛と支配が矛盾もなく同時に存在して、心の奥を奪っていく。レオンの手が、私の濡れた入口へ向かう。まだ触れていないのに、身体が反射で震えた。

「怖いか？」

囁きが優しい。だけど手は止まらない。

「……こわ……い。でも……」

「でも？」

「触れてほしい……っ♡」